

孫 政政 提出 学位申請論文

『日本語中国語音韻の対照研究』 審査報告

### 論文の内容の要旨

本論文は現代日本語と現代中国語の音韻における弁別的特徴と余剩的特徴の対照研究で、「清音・濁音」、「有気・無気」の聞き分けに関する問題を追究している。I部「はじめに」、第1章「日本語と中国語の子音の特徴」、第2章「臨淄方言」、II部「はじめに」、第1章「首都圏調査」、第2章「台南と厦門調査」、第3章「清濁の聞き分けの要因について」からなり、巻末に各地点の調査データを付す。

I部 第1章では日本語と中国語の子音を先行研究をもとに整理して対照し、日本語と中国語の子音の特徴を記述する。中国語は有気音と無気音が弁別的特徴として対立し、有声音と無声音が余剩的特徴で対立しないのに対して、日本語は有声音と無声音が弁別的特徴として対立し、有気音と無気音が余剩的特徴であって対立しない。この対立の違いに対する考察が本論文の出発点である。

第2章は臨淄方言の記述をする。まず、現代中国語と中国語の方言分布を概観する。中国の方言は北方方言（官話方言）、呉方言、湘方言、贛方言、客家方言、閩方言、粵方言の7つの方言グループに分かれている。主な音声の特徴としては、ほとんどの方言において有気音と無気音が対立し、有声音と無声音が対立しないが、呉方言には有声破裂音と無

声破裂音、有声破擦音と無声破擦音がある。

次に子音、母音、音節、声調の4つの面から臨淄方言の記述をする。臨淄方言は中国の北方方言に属する一方言である。中国では各地域方言の研究が盛んに行われるなか、臨淄方言に関する記述的研究はまだない。近年工業化にともなう人口移動の激化や、標準語教育の普及とともに、臨淄の若年層において伝統的方言の使用は急速に衰退し、方言音声も消滅しつつある。本章では、北京語との比較しつつ臨淄方言の音韻記述をした。各音素には、語頭、語中、語末の方言語例と日本語訳とをつけ、国際音声記号で表記した。臨淄方言は北京方言の音韻と類似するが特に声調に特徴がある。最後に先行研究を例に北京語の声調の史的変遷をまとめた。

第Ⅱ部は、4章からなる。

「はじめに」では中国語を母語とする日本語学習者における「清音・濁音」の聞き分けの問題を取り上げ、先行研究を参考に余剰的特徴と弁別的特徴の対照研究に関する述語の整理を行う。

第1章 2015年首都圏で行った調査をもとに記述する。日本語の「清音・半濁音（無声子音）と濁音（有声子音）」との対立の知覚について、首都圏在住の中国語を母語とする日本語学習者93人を対象に聞き取り判定の調査を行った。結果として、カ行がもっとも聞き取りの精度が高く、タ行、パ行の順に正しく知覚しやすいことを明らかにした。また、位置の音環境においては、語頭の聞き取り精度が最も高く、語中、語末、撥音の後、促音の後の順に正しく知覚しやすいことが分かった。これは

先行研究の成果を裏付ける結果となった。方言区画と聞き取り精度の差においては、呉語、北方語、閩語の順に正しく聞き取りの精度が高い傾向がある。個人差もあるが、学習歴や滞在歴が長いほど聞き取りの精度が高いことが分かった。

第2章は2018年台南（南台科技大学）と厦門（厦門大学）で行った調査をもと分析をおこなった。

孫（2016）で、首都圏在住の中国語を母語とする日本語学習者93人の調査をした結果、中国の南方方言（閩方言・呉方言）を母方言とする学習者と北方方言を母方言とする学習者に、方言による清濁の聞き分けの精度に差がある可能性を示した。南方方言の閩南語を母方言とする日本語学習者の日本語の清音と濁音の聞き分けの精度が高いかどうかを調べるために台湾と厦門で臨地調査を実施した。南台で日本語専攻の学生295人の調査を行った結果、閩南語話者でも無声音と有声音の聞き分けに混乱が起きることがわかった。有声・無声よりも有気・無気の方が優位な特徴であると考えられる。カ行の /k/ は各行の中で最も正しく聞くことが台南調査で再確認できた。厦門調査では日本語専攻の厦門大学の学生・院生67人の調査を行った。

第3章は、台南調査と厦門調査に基づき、適宜首都圏調査を参考にしながら、清濁の聞き分けについて（1）単語の馴染み度、（2）母音の無声化、（3）気音の有無の面から調査結果を分析した。（1）単語の馴染み度との関連を考察するため、厦門調査の63人と台南調査の152人を対象に結果の分析を行った。厦門、台南の調査結果から、単語の馴染み度

は清濁の聞き分けに関係がないことが分かった。厦門でも台南でも誤答率の高い項目と低い項目がほぼ同じ傾向にあること、馴染み度の高い「貧苦」「親近感」「勝手に」「社会」「絶対」「参考」「納得」は馴染み度が高いにもかかわらず誤答率が高いこと、反対に馴染み度が低い「こめかみ」「瑞花」「負け戦」は誤答率が低いこと、を明らかにした。

(2) 母音の無声化と清濁の聞き取りの関連を考察するために、首都圏調査の 93 人、厦門調査の 67 人、台南調査の 295 人を対象に結果の分析を行った。3 地点の調査結果から、清音項目では母音が無声化すると清音に聞きやすくなる、無声化する環境で無声化しない発音は無声化する発音より正答率が下がる傾向がある、無声化する拍の子音は必ず有気音であり、有気音の項目の正答率が高くなる傾向があることが確認された。気音の有無は清濁の聞き分けに影響する可能性があることが分かった。

(3) 気音の有無との関連を考察した。調査使用音声を 8 名の中国語母語話者に聞かせて気音の程度を判定してもらい、その結果と清濁の聞き取りの正答率を比較した。その結果、清濁の聞き分けは気音の有無と強く関わっていることが分かった。無気音と判定された語は濁音で、日本語学習者は正しく「濁音」と知覚する。有気音と判定された語は正しく「清音・半濁音」と聞く。子音が「有気音」であっても、中国語の有気音に近似する「有気音」のほうが正しく無声音と聞く。中国語の有気音より弱い「有気音」は中国語の有気音に近似する「有気音」より、濁音と知覚しやすくなる。例外として「アダプター」の「ダ」は有声音だが、正答率が低かった。「カリュプソー」の「プ」は無声化するが、濁音に聞

いて正答率が低かった。このような例外項目について、気音や母音の無声化以外にも「清音・濁音」の聞き分けに影響する要素があると考えられる。今後の課題にしたい。論文の最後に本論文に関する参考資料を掲載した。

### 論文審査の結果の要旨

申請論文『日本語中国語音韻の対照研究』は、日中両語の音韻の弁別的特徴と余剩的特徴の差についての対照研究である。中国語話者は中国語の弁別的特徴である気音について敏感であるが有声無声については無自覚であり、反対に日本語話者は日本語の弁別的特徴である有声無声に敏感であるが、気音の有無については無自覚である。この研究は日本語教育の「清音・濁音」の聞き分けの習得に貢献する。このような観点から研究に取り組んだ着眼点は評価に値する。

このような研究が活発でなかったことには次のような問題があると考えられる。この研究は日本語教育で取り上げられ「清音・濁音・半濁音」という日本語の五十音図に基づくため、破裂音・破擦音と気音という音声学的整理手法が異なる。また、「四つ仮名」のザ行ダ行の音声が摩擦音と破擦音とに実現することに対する日本語音韻史の観点や方言差と個人差の問題整理も十分とは言えなかった。例えば、日本語の具体音声では「じ・ず」は破擦音から弱い破擦音から摩擦音までの異音の幅が大きく、それが現れる位置の音環境、方言差、話者の特性、場面によって現れる。

気音を手がかりに清濁を判断する学習者にとっては困難なことである。本研究は、学習者が五十音図で学ぶ「清音・濁音」を、音声学の弁別的特徴と余剰的特徴という気音の有無と声の有無の対立の問題と捉え直すことによって、従来の研究を推進した論文であると評価できる。

本論文の特筆すべき特徴は、日本語母語話者の音声を中国語母語日本語学習者が「いかに聞くか」を、首都圏、台湾、厦門の3地点、458名の話者について対面で調査していることと、言語外の情報を丹念に聞き取って解釈しようとする点である。このような多人数対象に言語のみならず社会的要因の聞き取りをした調査は今までになかった。

第Ⅰ部では、申請者の出身地である中国臨淄方言音韻体系を記述する。出身方言の音韻体系を記述することは言語研究の始まりである。また臨淄方言の音韻体系記述はまだ例がない。中国で普通語に飲み込まれて伝統的方言が失われていく中、地方方言の音韻体系の詳しい記述は中国語方言研究に寄与する。

第Ⅱ部では、日本語学習者に首都圏方言話者の音声を聞かせて、その音声の清音・濁音を判断させる調査から、日本語と中国語の有気・無気、有声・無声の対立について考察する。

まず、首都圏在住の93名の調査を分析する。話者は中国各地から来た学生・社会人である。「清音・濁音」の観点から調査項目を設定したため、有気・無気に関与しない摩擦音のサ行の「清音」が調査項目にある。しかし、その結果、言語外の条件として学習歴や滞在歴が短い話者は、摩擦音のサ行音や語頭の破裂音や破擦音でさえも清音を濁音に聞くこと、

反対に日本語能力試験の結果が低くても日本在住歴が長いと聞き取りの精度が増すことが分かった。滞在・在住歴が「清濁」の聞き取りに関与することが分かる有益な指摘である。言語内の条件では、kがt・c・pより聞き取り精度が高い傾向があることを指摘する。これは示唆に富む指摘であるが、さらに音声学的な解釈がほしかった。

次に日本語専攻の学生対象に、台湾では南台科技大学 295 人、厦門大学・大学院生 67 人の臨地調査を行う。言語外の条件として、ことばの馴染み度と聞き取り精度の関係について分析した。馴染み度が高くても正答率が低い語「社会、絶対」等があり、逆に馴染み度が高くても正答率が高い語「こめかみ、負け戦」等があった。この結果、語の馴染み度と正答率に関係はなく、言語内の条件が関与していると解釈できることがわかった。分析結果から指摘で極めて優れている。

言語内の条件として、母音の無声化と聞き取りの精度について考察し、無声化した拍を含む語の正答率が高いことを指摘する。首都圏方言話者の音声を調査音として使った結果で、首都圏生育の話者でも義務的な無声化が起きない事があり、それ故その項目の聞き取りの精度は悪かったと解釈する。日常の言語生活では無声化が規則的ではないこともあり、「清音・濁音」習得の困難さを指摘する優れた指摘である。

日本語話者の発話音声に伴う気音に注目して中国語母語話者 8 名による調査語の気音の判定と正答率を比較した。この手法はとりわけ優れている。判定者の多くが有気音と判定した語は正しく清音と聞くことが多く、無気音と判定された語は正しく濁音と聞くことが多い。有気か無気

か判定に迷う語は正答率が低かった。このことは日本語音声の余剰的特徴である気音の分布と傾向が、中国語母語話者の清音と濁音の聞き分けに大きく関与することを示唆する。この指摘は興味深い。

本論文は、独創的なテーマと手堅い手法で得た資料を丁寧に分析したもので、優れた新知見に富むと評価されるが、次のような問題もある。母音の無声化と気音があり、語の馴染み度が高いにもかかわらず、正答率が低い例や、清音であると理解しているのに濁音に聞こえる例や、清音と濁音のどちらか判定しにくい例がある。これらの音声学的な条件を追究して規則化していく必要がある。また全体にせっきく収集した膨大な資料を生かしきれていない部分を含み持つ。このような問題が残るものの、これらは今後研究を進めていくことで克服されるものと考えられる。

以上により、本論文の提出者孫政政は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

令和3年12月9日

主査	國學院大學客員教授	久野	マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	三井	はるみ	㊟
副査	國學院大學兼任講師	中川	千恵子	㊟



孫 政政 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、  
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和3年12月9日

学力確認担当者

主査	國學院大學客員教授	久野	マリ子	㊞
副査	國學院大學教授	三井	はるみ	㊞
副査	國學院大學兼任講師	中川	千恵子	㊞